



彼の指先は
繊細に動く

素行に反して

しゃ
しゃ

スト
ツ



見据える
未来を
大切にして
いるのが
分かる

君が

占いは
信用なら
ないが
いきなり
ふざける
べし？
しっ…

君の

気がする…



いつからだろう

んっ
んっ

はあ

んっ



「ほっ」

「いっ」

「びん」

「ほっ」

「びん」

「ほっ」



「ほっ」
今ので何回目だべ？

「いっ」

指先ひとつ
ひとつつから
教えられる



「あっ」

「びん」

「いっ」

「びん」



「いっ」

「びん」

わからないっ…

「ほっ」



未知の感情を
怖く思うように
なったのは



ダメな僕

ダメな大人

ダメな人間

ひゅっ
ひゅっ

ひゅっ

ひゅっ

…うん
うん…っ!!

ッ…僕の、中に
出してくれ……!!

ひゅっ

んぐっ

こんなこと

ダメになっちゃおう

すっ

許されたい

許されたい

ひゅっ

ひゅっ
ひゅっ
ひゅっ
ひゅっ
ひゅっ



ズツ

カ
ン
ク
ン

カ
ン
ク
ン

カ
ン
ク
ン

カ
ン
ク
ン

カ
ン
ク
ン

カ
ン
ク
ン

カ





石丸っち

もう優等生
なんかじゃねえな



もう優等生
なんかじゃねえな

規律正しく
まっすぐに
真っ当な大人に

疑う余地もなく
僕の未来は
そうあるべきだと
思っていた

歯車がずれたのは
彼のせいだったのだろうか

それとも随分と
前からだったのだろうか



石丸っちゅ



ちやんと食わねえと
元気出るもんも
出なくなんぞ！

それでも彼の指先が
似合わないくらいに
優しく触れるのを
僕は知っている